

H. Markowitz 教授の ノーベル経済学賞受賞によせて



落合 卓四郎 (数学教室主任)

この4月より当理学部が開講された「予測制御数学寄付講座」に数学科が客員教授として招へいた、ニューヨーク市立大学財政学部、H. Markowitz 教授が1990年度ノーベル経済学賞を受賞されました。

Markowitz 教授は、10月1日に夫人と共に来日されました。「Mean-Variance Analysis in Portfolio Choice and Capital Markets」という冬学期の講義を始めていただく前日に受賞が発表になりました。受賞理由はこの講義のテーマである資産運用の数学的解析でした。これは、この寄付講座にとって真にさいさきの良いうれしいことでありました。

関連することを「学内広報」にも寄稿しますので、ここでは、Markowitz 教授が、受賞対象となった理論を扱った学位論文のアイデアをいかに得たかのエピソードを、ご本人にうかがったので紹介したいと思います。

1952年シカゴ大学経済学部の大学院生であった Markowitz さんは学位論文のテーマを相談しようと指導教官の J. Marschak 教授のオフィスの前で待っていたところ、株の仲買人がやはり先生との面会を希望して待っていたそうです。Markowitz さんが学位論文のテーマを相談するために来ていることを知ったその仲買人は、強く株式市場のメカニズムについて研究するよう勧めたそうです。オフィスに入って Marschak 教授から何を研究したいかと尋ねられて、株式市場について研究したいと答えたそうです。そこで同大学のビジネススクールでその専門家である M. Ketchum 教授を紹介され面会に行ったそうです。その時 Ketchum 教授から J. B. William 教授の教科書「Theory of Investment Value」の読破を勧められました。早速、図書館に行って、この教科書を眺めているうち、「全部の卵を同じカゴに入れて持ち運ぶな」といった経験則的なそれまでの投資理論に確率論的視点を入れれば、きちんといろいろなことが説明できることに気がつきました。さらに Uspensky 教授の Introduction of Probability (確率論入門) を手にしたら、ちょうどぴったり使える理論をそこに発見して、Markowitz 氏の創始なる Portfolio 理論がその時生れたそうです。その図書館での一日は、今迄で最も大事な一日だったそうです。